

# 熱田神宮 宝物館だより

## 熱田神宮宝物館

編集 内田雅之

〒456-8585  
名古屋市熱田区神宮一丁目1番1号  
TEL (052)671-0852 FAX (052)671-1202  
(年6回発行)

新春特別展「熱田神宮名宝展～宝物から見る歴史と信仰～」より

1月1日(火)～1月29日(火)  
(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします



(部分)

重要文化財 <sup>うわぎ</sup>表着 萌黄小葵地桐竹鳳凰文二重織(古神宝類) 1領 身丈165.4cm 衿86.3cm 室町時代

室町幕府第八代将軍足利義政が、当神宮の御遷宮にあたり御祭神のために寄進したとされる御装束である。表着は女房装束の一番上に用いる衣で、本御料は裏地を用いない単仕立てである。

裂地は小葵文を浮織物とした萌黄地に、紫・黄色の色系で桐樹・鳳凰・洲浜をあらわした所謂「桐竹鳳凰文」を施した二重織物である。

鳳凰は聖天子の出現を待ってこの世に現れるとされる想像上の瑞鳥で、梧桐の木に棲み竹の実のみを啄ばむとされ、この文様は天皇が用いる「黄檳染御袍」の文様を簡略化したものである。本来は別の色系で竹樹を中心に対称となる形で鳳凰・桐があったことが伺えるが、現在は残念ながら欠失している。

## 新春特別展「熱田神宮名宝展～宝物から見る歴史と信仰～」

およそ1900年という悠久の歴史をもつ熱田神宮は、その永い年月の中で、数多の人々から格別の崇敬を受け続けています。そしてその崇敬の証しといえるものが、現在、宝物館で保存・公開されている御宝物です。昨今を問わず、国家安泰や自身の祈願の際、また諸願成就の御礼として寄進されたこれら真心の証しはおよそ6,000点に上ります。その内訳は皇室をはじめ、将軍・戦国武将や藩主・一般の篤志家に至るまで、広い層から崇敬を集めてきました。

熱田神宮宝物館ではこれら御宝物の展示を通して当神宮御祭神の御神徳、また神道教化、さらには連綿と伝えられ昇華されてきたわが国の伝統工芸の粋を伝播しております。

本展は、先人のまごころをこめて献納された御宝物の中から著名な歴史上の偉人の献納品や古くから名宝として誉れ高き品々を展示し、御宝物を通して、熱田神宮の歴史、また先人たちの信仰の篤さを再認識して頂く事を目的に開催します。

新年の初詣にあわせ、是非御拝観くださいますよう御案内申し上げます。

■会 期 平成31年1月1日(火)～1月29日(火)  
(会期中無休)

■主 催 熱田神宮 中日新聞社

■後 援 愛知県・名古屋市教育委員会  
名古屋鉄道株式会社 神社本庁

■特別講演会 平成31年1月19日(土)

演 題 「熱田の至宝 - 護り伝えられたご宝物 -」

講 師 熱田神宮 文化部長 野村辰美

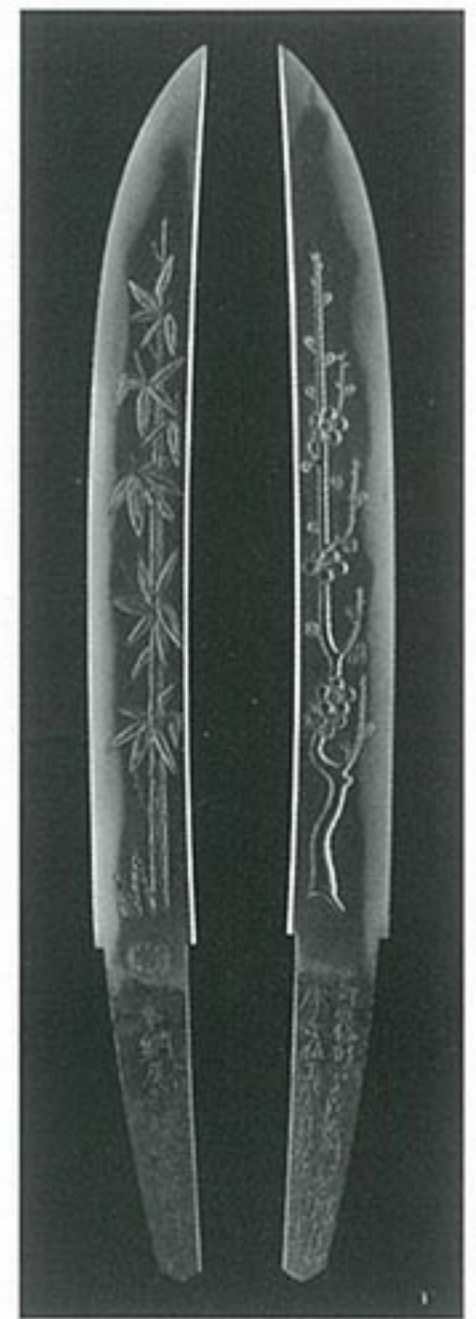
※午後2時より 於文化殿講堂(聴講無料)

■拝観料 大 人 800円(500円)

高大生 500円(300円)

小中生 200円(100円)

※( )は20名以上の団体等割引料金



重文 脇指 越前康継



重文 蓬莱蒔絵鏡箱

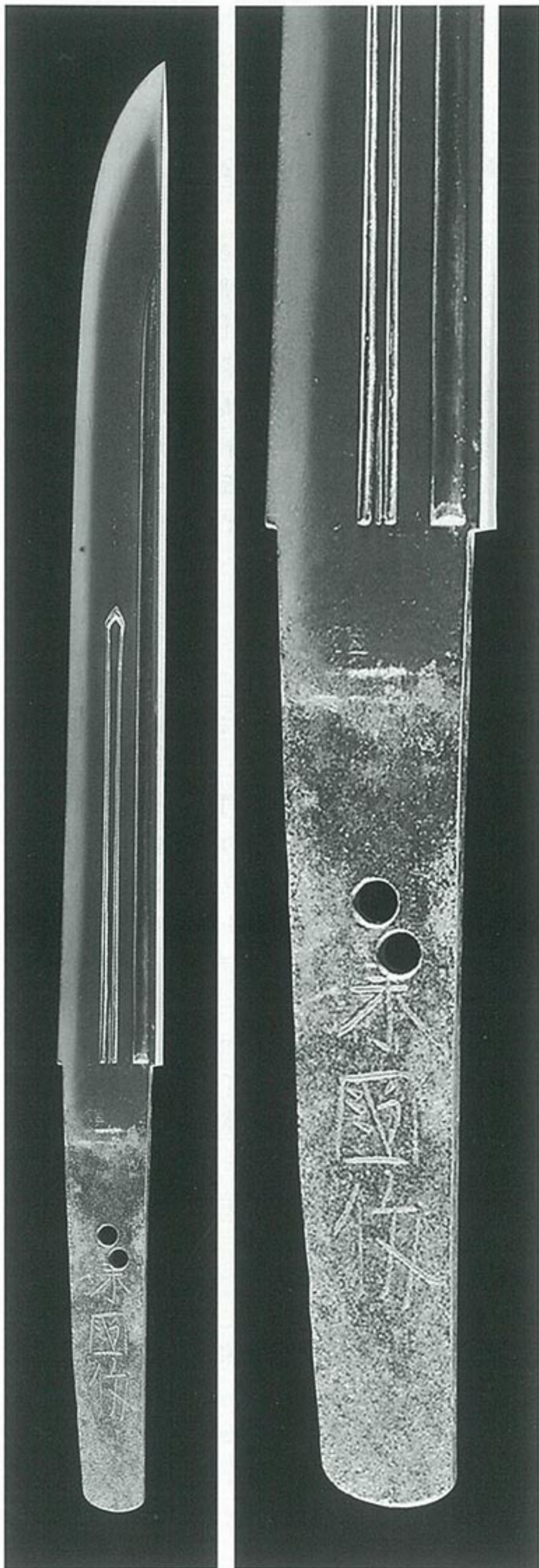


重文 表袴 白窠霞文浮線綾二重織



重文 木造舞楽面 崑崙八仙

## 新春特別展 展示品より



国宝 短刀銘 来国俊 1口  
 正和五年十一月日  
 長 25.1cm 内反り僅か 鎌倉時代

平造、三ツ棟、常寸ながら身幅広く重ねが厚い姿。  
 小板目肌よく詰み、地沸細かくつき沸映り立つ地鉄  
 に、刃文は中直刃、中程の匂幅広くなり総体に小沸  
 よくつき、刃中小足・葉入り、弱い金筋僅かにかか  
 る。帽子は直ぐに二重刃、焼き深く先小丸に長く返  
 る。表裏共角留の刀樋に素剣を添える。

山城国の刀工の中で鎌倉時代中期から南北朝時代に活躍したのが国行を事実上の祖とする来一派である。中でも「来国俊」と三字銘を切る国俊の作は多く散見できる。国俊は粟田口吉光・新藤五国光・長船景光らに次ぐ短刀の名手として知られ、国宝指定の短刀は本作の他、黒川古文化研究所所蔵の2口が存在している。

徳川美術館には「正和四年十月三日歳七十五」と銘を切った太刀（重文）があることから、本作は来国俊七十六歳の作と判る。常よりも大振りとなり堂々とした姿で、短刀の名手の名に相応しく、地刃の出来優れ、しかもおよそ七百年の星霜を経て健全であるのが好ましい。古来「熱田の来国俊」と称せられ著名なものである。

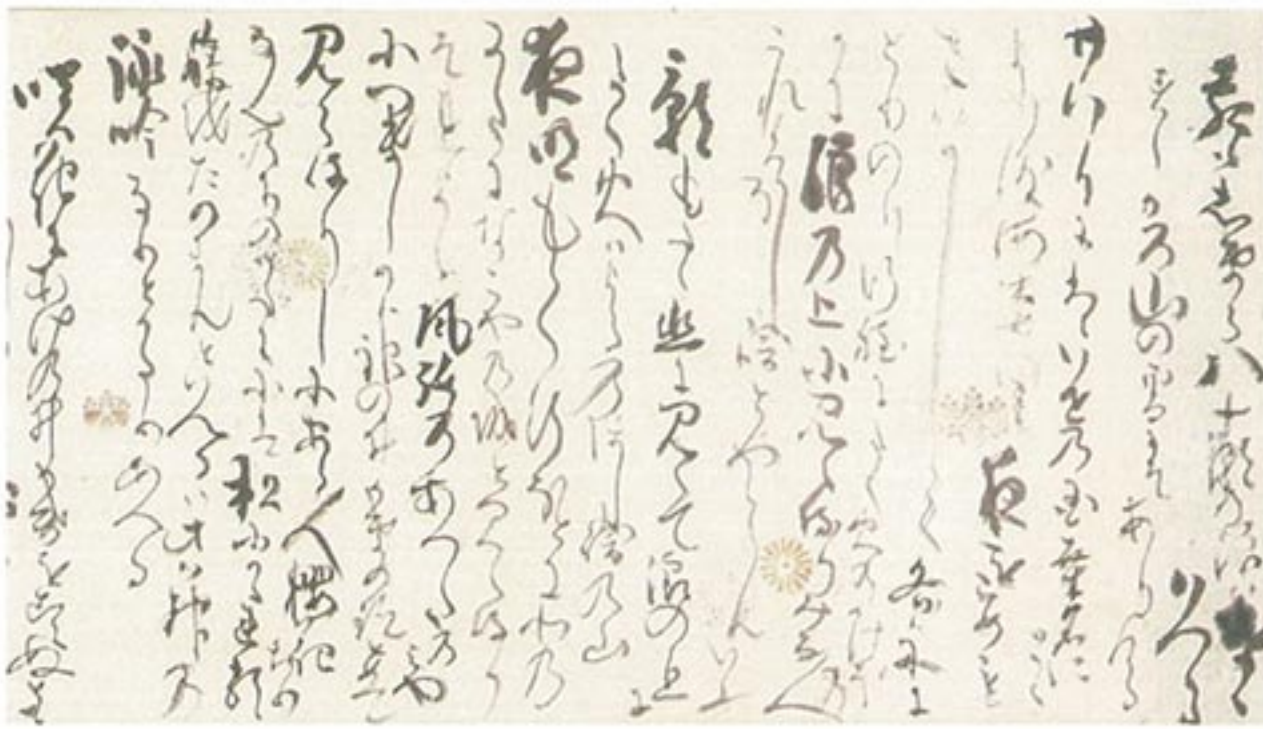
# 2月平常展 — 熱田神宮宝物展 —

2月1日(金)～2月26日(火)

(期間中無休)

※展示品は毎月入替いたします

## ～展示品より～



あづまのみちのき  
東海の記(断簡) 1幅 江戸時代  
縦28.3cm 横66.7cm

江戸時代初期の文人として著名な鳥丸光広が、日光東照宮へ勅使として下向した際の紀行文「路の記(東海の記)」の一部である。内容は桑名から海上七里を船で渡って宮(熱田)に着き、当神宮を参拝して笠寺へ行く辺りを述べている。料紙には金泥・藍で十六弁の菊文、罫

をあらわした裏菊文、五三桐文が型押しで散らされている。更に総体的に文様をさけて筆写を行っている様子が窺える。

光広は生涯でかなり書体が異なっているが、これは自筆と推定される。



かんもうでず  
寒詣図 伊藤君樵筆 1幅  
縦26.0cm 横38.8cm 江戸時代

当神宮の西門であった鎮皇門(戦災で焼失)前の様子をあらわしたもので、雪の降り積もる寒中、当神宮に詣でる人々を描いている。

寒詣は旧暦の大寒(新暦の一月二十日あたり)の頃に行われていた民衆の行事の一つで、暮れの風物詩として知られていた。

寒の入り、寒がわり、寒のあきには新形の浴衣を着て、提灯をさげた

人の参拝や、鐘・太鼓・銅羅などを打ち鳴らす人々など、この行事の盛んであった様子が窺える。

## その他の主な展示品 ◎重文 ○県文

- 《書 跡》 ○寛永十三年熱田万句 華嚴経断簡 伝 淀君筆和歌色紙 徳川秀忠知行朱印状 他
- 《絵 画》 菅公坐像 墨竹画卷-圖南勝性筆- 四君子の図 熱田神宮・創祀千九百年-斎藤吾朗筆-
- 《工 芸》 ◎彩繪檜扇 ◎入帷残欠 ○春敲門扁額 ○金銅釘隠 梅花散双鶴鏡 笠燈籠 他
- 《刀 剣》 ◎太刀 銘 宗吉作 ◎太刀 銘 備州長船重光 太刀 銘 備中国青江頼次 太刀 銘 備州長船祐光 他  
元亨二壬月日 嘉吉二年二月日
- 《コーナー展示 幕末維新の群像～野原コレクション～》 明治天皇尊影 天皇旗 明治天皇御料御卓子掛  
明治天皇・昭憲皇太后御宸筆 徳川慶喜筆四大字 吉田松陰書状 坂本龍馬肖像画-公文菊倦筆- 他